

日本がん疫学研究会

日本医師会医学賞を受賞して 渡辺 昌 (国立がんセンター研究所)

思いがけず、平成7年度の日本医師会医学賞をいただき、大変光栄と思うと共に、社会医学部門の受賞は初めてのことですから、今後ますます大変というのが実感です。この賞には基礎医学、臨床医学、社会医学部門が設けられています。受賞タイトルは「喫煙の健康影響と対策に関する研究」ですが、これは多重がんの研究から喫煙のリスクへの研究、喫煙の社会影響へのモデルづくり、また、WHO指定研究協カセンター長として喫煙対策にも取り組んできたこと等が評価されたとのこと。単なる論文数のみならず、研究から対策へ、という疫学本来の姿勢が評価されたことは嬉しいことです。この受賞を平山先生にお話した時、医師会が喫煙問題にやっと前向きになったか、と大変喜ばれ、11月1日の受賞式にはぜひ出席するとおっしゃっていただいたのに10月26日に鬼籍に入られたのは残念の極みでした。

私が病理部にいたころは疫学部と廊下をはさんで平山先生の部屋があり、たばこの危険は本当にあんなにあるのかな？という多少疑いの眼をもって見ていました。ところが、疫学部長になり、喫煙関連がんの多重発生、肺多発がん、若年肺癌、等の症例対照研究で、なるほど、たばこはこんなに悪いのか、と納得し、それ以後勉強すればする程、まさに「百害あって一利なし」は「煙草」と信じるようになりました。

11月下旬にチェンマイでアジア太平洋たばこ対策会議が開かれ、主としてアジア諸国から300人強の参加がありました。その後WHOコンサルタントとしてカンボジアに1週間出向き、政府へたばこ対策を進言してきたのですが、まさに国際たばこ産業の圧力を眼の当たりにみてきて、アジア各国が協力しあわねばどうしようもないと思いました。マルボロの Phillip Morris 社会長が「私は吸わない。唯、若者、貧乏人、黒人、馬鹿者に売るだけだ」といったそうですが、カンボジアは年間400億ドルの歳入の30%をたばこから得、一方、海外へたばこ購入の為210億ドル(全体の30%)も支払わねばならない国、しかもそれがアジアの最貧国で平均年収200ドルしかない、というのは大変な悲劇です。たばこ1箱の値段は60セントくらいで

すが、これで米1kg以上買えるのに、依存症になってしまうと年収の10-20%もたばこに費やしてしまうのです。まさに貝原一軒が煙草は身処を潰す、といった江戸時代と同じです。

私の今回の受賞は大勢のたばこ問題に取り組む人への受賞、と思っています。副賞もWHOで有益に使って頂くよう寄付させて頂きました。今後も微力をたばこ対策に目配りしたい、と思っております。幸い、日本WHO協会も支援していただけることになり、平山先生の文献を元に clearing house らしきものも作られればと願っております。ぜひ、たばこに関心のない方もご支援くだされば幸いです。

平山 雄先生の思い出

宇都宮讓二 (兵庫医科大学第二外科)

家族性腫瘍研究会会長, UICC Sympo. Familial Cancer and Prevention. 実行委員長

私が先生のご逝去を知ったのは10日以上も経てからのことである。それも家内が週刊誌で見たと知らせてくれた。一瞬、別の人ではないかと確かめさせたほどである。本年8月21日、兵庫県対癌戦略会議でお目にかかり、夕食をお誘いしたが、「家内が待っているから、また今度にしよう」と急いでお帰りになった。その時はいつもと同じ活動的で心身ともに健康的な様子で、会議でも兵庫県における癌一次予防の成果を見事に発表され、皆に大きな希望をお示しになった。私も年を経るにつれて予期せぬ出来事にはかなり慣れていくつもりであった。特に大地震以来、その覚悟はより強まったとはいえ、大きなショックを受けざるを得なかった。

私が平山先生と最初にお会いしたのは1960年、スローンケタリング癌研(SKI)に留学した時のことである。Dr. Wynder とともに仕事をしておられたが確かその数年前の Johns-Hopkins 大学の疫学研究所に次いで二度目の渡米とお聞きしていた。SKI ではたまたま癌化学療法 mass screening の反省から免疫・遺伝・ウイルスなどの基礎的研究へと方向転換がなされ

た時で、研究所長は化学療法の人 (Dr. Rhoads) からウイルス学者 (Dr. Durdorf) へと替わっていた。私は遺伝学者 (Dr. Woolley) の下で癌の DNA を用いた発癌という難題を与えられ、Drs. Raus, Shope, Bitter, Friend, Gross, Moore, Stewart and Eddy などの oncological virologist の教えを受けて実験をしていた頃であった。

宿舎は人の紹介で国連のすぐ前の Biblical Seminary という一種の聖書学校の一室に入ったが家賃が月 \$25 であったと思う。平山先生がある日、訪ねて来られ、これは安くていいからここに入ると言っていて、早速上の階に移って来られた。夜になるとブラックアンドホワイトを1本持って訪ねて来られ、ベッドに腰をかけて飲みながら、時には朝まで癌のことを語り合った。当時、癌の疫学は始められたばかりで何でもいから癌のことを話せと言われて恐るべき知識吸収力を見せられた。外科学教授である御尊父の薫陶を受けておられたので、外科のこともよく知っておられた。その時にお伺いしたウィットにとんだお話し振りが、ついこの前のように思える。Dr. Wynder から子宮癌の原因調査をテーマにもらった一人の若い研究者が患者の夫にスメグマの提供を頼んで歩いて全て拒否され、思いあまって馬から採取しようとして蹴られて大怪我をした…とか。帰国後、国立がんセンターに入られ、癌の疫学研究班を組織された時に班友として私のポリポーシス研究に20万円の研究費をいただいたのは1970年頃かと思う。これで一人の case worker の方をアルバイトで来てもらったのが始まりで、東京医科歯科大学にポリポーシスセンターが発足した。これは今も「疾患遺伝子実験センター」として続いている。その班会議で西岡久彌先生がポリポーシスを伴わない大腸癌家系が伊勢の“とうじ島”にあることを知っておられるから調査をしてはどうか、とお勧めいただいた。私は早速、島を訪れ、家系調査を行い発表したのが、わが国における Lynch 症候群または HNPCC として知られる疾患の研究のきっかけとなり、その後 DNA 修復異常と発癌の研究へと発展した。

私が兵庫に移った際、たまたま県の顧問をしてもらったので大変喜ばれ、1989年、神戸市で Dr. Lynch とともに International Symposium on Hereditary Colorectal Cancer を行った時、会場では海外における顔の広さを遺憾なく発揮され、平山先生のいるところ、たちどころに人の輪を作り、会議はなごやかに活発に進行することができた。1993年、神戸での第一回 DDW-Japan の時に UICC Familial Cancer Project の Asia-Oceania strategy meeting を青木國雄先生と計画した時も若さを発揮されてたちどころに報告書を作っていた。また、展示会場では「食品と癌予

防」を計画してお一人で5日間をつとめられた。

私は長く家族性癌のことをやって来たが、それには平山先生の精神力、行動力、若さ、そしてあくなき探究欲に接したことが大きいと思っている。そして再びあの笑顔と熱のある話しぶりに接することが出来ないと思うと、言い知れない淋しさと堪え難い悲しさを感じざるを得ない。

先頃9月の Genova の会議の時、私は1997年5月の UICC Symposium Familial Cancer and Prevention を富永祐民先生とともにお引き受けすることとなった。年齢的にも大きな負担を感じ、時々弱気の出る今日この頃であり、先生がご存命であれば、活を入れていただけたと思っているが、何とか頑張って平山先生にこの Symposium を捧げたいと思う。

中堅・若手がん疫学研究者による 第2回「がん疫学研究の将来を考える集い」 浜島信之 (愛知県がんセンター研究所疫学部)

本年8月4日・5日に1泊2日で上記の「集い」を愛知県労働者研修センターで開催した。10年前の1985年(3月)にこの会場で同名の「集い」が開かれたことから、今回を第2回と位置付けた。タイトルに反しないよう参加者資格は40歳代中頃までとし、約50名の中堅・若手がん疫学研究者に呼びかけたが、出張等の理由により出席者は33名となった。

4日の夕方に集合し、夕食後、7人の呼びかけ人(深尾 彰、津金昌一郎、山口直人、浜島信之、渡辺能行、津熊秀明、秋葉澄伯、敬称略)が「これから何をすべきか」について意見を述べた。その後、午前2時までほとんどの参加者が参加して、にぎやかに意見を交換し親睦をはかることができた。このことは、今回の「集い」の最も大きな成果であったかもしれない。

5日には「大規模コホート研究の将来」、「化学予防」、「がん情報提供」、「がん検診」、「疫学方法論の展開」、「疫学研究と社会」の6つセッションで19人の参加者から発表が行われ、最後に「新たな発展をめざして」という題で自由討論を行った。

これらのセッションで将来の課題として指摘されたことは、1. 研究の組織化: 大規模な疫学研究の場合には継続的に多くの作業が必要になる。この作業を若手の研究者に押しつけるのではなく、指導者自ら事務局を組織し作業が可能となるよう配慮すべきである。2. 蓄積されたデータの解析: がん登録事業、大規模コホート、主要がんセンターには既に多くのデータが

蓄積されている。貴重なデータを生かすために若い研究者の流動的な活用を考えるべきである。3. 疫学研究における倫理・法的側面：疫学研究を含め医学研究における Informed Consent やプライバシー権について注目が集まってきている。これらの点につき、勉強する機会や議論が必要である。4. 疫学の地位向上：疫学研究成果を一般国民に幅広く正しく知らせることにより、疫学研究に対する理解を深めてもらう必要がある。このことにより、疫学研究の実施が容易になり、また疫学研究の地位向上にも役立つであろう。5. 疫学研究の質の向上：調査票の改善、曝露量の定量的な把握など疫学研究の質を向上させる努力が更に必要である。検診の評価についても質の高い研究が望まれる。6. がん予防におけるがん疫学の位置：がん予防は、介入による実践的な時期に入ってきており、疫学者は他分野の研究者と共に（または負けずに）積極的に活動する必要がある。なお、この「集い」を開催するにあたっては、日本がん疫学研究会からの援助を頂いた。心からお礼を申し上げる。

呼びかけ人を代表して 浜島信之

第54回日本癌学会に参加して

東あかね（京都府立医科大学）

平成7年10月3日～5日にかけて、京都国際会館において第54回日本癌学会が、井村祐夫京大総長を学会長として開催されました。演題数はワークショップや講演を含め、過去最高の計2722演題で、疫学部門は口演10題、示説15題、計25題が発表されていました。

(I) 疫学一般演題について

がんの臓器の部位別では、肺8、胃4、乳3、子宮2、肝、大腸・直腸、前立腺、舌、および血管肉腫が、各1と、肺がん関連演題の増加が目立ちました。手法別には症例対照研究4、症例対照研究の meta-analysis 1、多重ロジスティックモデル1、血清疫学3、分子生物学2、病理学1、治療の費用便益に関する研究1、生存率と予後に関する研究2、外国をフィールドとした研究3、コホート研究2とオーソドックスな内容でした。

今回の疫学部門の示説が誤って「免疫」部門となっていたために、口演と示説の時間帯が完全に一致して聴衆が2カ所に分かれ、討論は発表者同士で行われる場面が目立ちました。いつも活発に討論の火つけ役をされる平山先生のお姿がなく、喫煙開始年齢が15～

6歳であることが、喫煙継続年数を調整しても肺がんの最も強いリスクになるとの先生の演題を、田島先生が代理発表されました。後に先生の訃報に接し、この演題が最後のメッセージとなったことを知りました。

(II) ワークショップについて

「日本で増加しつつあるがん」をテーマに、肺がん、大腸がん、乳がん、前立腺がん、脳腫瘍の5種類のがんについての発表がありました。

肺がんについては、疫学者の予測どおり、男性の肺がん死亡数は、1993年に胃がんを抜いてトップの座につきましたが、今後の推移の予測が次のように発表されました。まず、死亡数では、約20年後の2015年には現在の約3万人から約9万人に増加、しかし、英米で肺がん死亡率の減少ないし増加の鈍化が見られるのと同様に、日本でも男性における喫煙率の低下、低ター、フィルター付きたばこの普及、肺がんの病理像の変化（扁平上皮がん減少）、および診断技術の定着などによって特に若年男性群において死亡率の増加のスピードが鈍化していくとのことです。平山先生からのメッセージが活かされ、天国の先生に喜んでいただけた日が1日も早く来て欲しいものです。

大腸がんについては、部位では横行結腸や上行結腸で、形態的には、小さいポリープや平坦型が増えていることが臨床現場で感じられているとのことです。診断技術の進歩の影響を除外するために、80-84年と91-92年に診断されたポリープの標本を、摘出時期をブラインドにして診断し直すという緻密な検討の結果、最近では腫瘍性病変のうち、がんの割合が増えていることと、ポリープの異型度が強くなっている（特にS字状結腸）ことが報告されました。ポリープが大きくなる前に遺伝子障害が多くおこり、異型度が強くなっているのではないかと、約12年の間に発生頻度の増加だけでなく、このような組織学的変化が見られたことは演者自身にとっても驚きであったと発表されました。

乳がんについては、乳がんの死亡増加に初産年齢の高齢化がどのように関与しているかを症例対照研究から得られた相対危険度をもとに計算された報告でした。女性の高学歴化や就労女性の増加によって初産年齢の高齢化はさらに進むとともに、この点に予防的介入を行うことは困難であると考えられますので、初産年齢の高齢化の寄与があまり大きくないと報告にやや安堵しました。

前立腺がんについては、自然史モデルの作製、症例対照研究からの危険因子の検出、集団検診結果から累積罹患率を求めるなど、幅広い発表でした。

増えているがんとして、脳腫瘍が話題となったのは

のなかで、今世紀やり残したこととして、「がん制圧のための実践とそのための仕組み、さらにその成果を科学的に評価するための計画的手順の作成」が指摘されていた。本分科会を聞いて、ここにいわれるようながん制圧に直接結びつく疫学研究が今後本学会で多数発表されることが望まれた。

第6回日本疫学会学術総会ご案内

1) 開催年月日：平成8年1月25-26日（木-金）

開催時刻： 第1日目：9:00-18:00
第2日目：9:30-17:00

2) 開催場所：愛知県がんセンター国際医学交流センター
（メインホール、大会議室、視聴覚室）

3) 学会長：富永祐民（愛知県がんセンター研究所）

4) 主 題：「疫学から予防へ」

5) 会長講演：「疫学から予防へ」

6) 特別講演：Dr. Judith Mackay（ホンコン）
“Smoking control in Asia”

7) シンポジウム：

主 題「疫学から予防へ」
主要領域について、疫学から予防の歴史
と将来を展望する

座 長：大野良之（名古屋大学医学部予防医学）
徳留信寛（名古屋市立大学医学部
公衆衛生学）

領域 演者 (所属)

- | | | |
|---------|------|--------------------------|
| (1) がん | 渡辺 昌 | (国立がんセンター研究所
がん情報研究部) |
| (2) 循環器 | 小西正光 | (国立循環器センター集団検診部) |
| (3) 難 病 | 永井正規 | (埼玉医科大学公衆衛生学) |
| (4) 感染症 | 田島和雄 | (愛知県がんセンター研究所疫学部) |

(5) 老人保健 柴田 博
(東京都老人総合研究所
地域保健研究部)

- 8) 口 演：総会口演と分科会口演に分ける
総会口演：各分野から選択された少数の演題
(スライド使用あり)
分科会口演：総会口演以外のすべての演題
(スライド使用なし)

分科会は3会場（A, B, C）で行う。
各分科会に座長と別に「コメンテーター」を置き
分科会終了後に総会会場で各分科会のハイライト
を紹介してもらう。

9) ポスターセッション：
適当な場所が無いため省略し、分科会口演で
代える

10) 懇親会：1月25日（学会第1日目）
午後7時から、「ルブラ王山」

第3回日本疫学会セミナーご案内 （日本禁煙医師歯科医師連盟との共催）

1) 開催月日：平成8年1月27日（土）9:50-17:00

2) 開催場所：愛知県がんセンター国際医学交流センター
（メインホール、大会議室、視聴覚室）

3) 世話人：富永祐民（愛知県がんセンター研究所）

4) 主 題：「喫煙対策の実際」

5) プログラム（案）

基調講演：Strategy for smoking control
Judith Mackay (Hong Kong)

セッション1

学校における喫煙習慣の介入
西岡伸紀（新潟大学教育学部）
村松常司（愛知教育大学健康科学科）

セッション2

保健医療の場における喫煙習慣への介入
川根博司 (川崎医科大学内科)
小川 浩 (愛知みずほ大学人間科学部)

セッション3

職場における喫煙習慣への介入
中村正和 (大阪がん予防検診センター調査部)
山本蒔子 (JR仙台病院保健管理部)
千先康二 (陸上自衛隊第10師団)

セッション4

地域における喫煙習慣への介入
岡山 明 (滋賀医科大学福祉保健医学講座)
大島 明 (大阪がん予防検診センター調査部)

総合討論

事務局：愛知県がんセンター研究所疫学部
(事務局長：田島和雄)
〒464 名古屋市千種区鹿子殿1-1
TEL：052-762-6111 (内線：8852)
FAX：052-763-5233 (図書室)

第19回日本がん疫学研究会

会長：徳留信寛
(名古屋市立大学医学部公衆衛生学教室)

期日：平成8年8月26日 午前9:00～午後5:00

会場：名古屋市立大学病院5階ホール

事務局：名古屋市立大学医学部公衆衛生学教室

TEL：052-853-8174～6

FAX：052-842-3830

E-Mail：tokudome@med.nagoya-cu.ac.jp

主 題：食生活関連がんの予防

講 演：文部省科研費国際学術研究がん特別調査で
実施されている食生活関連がんの研究

特別講演

「世界のがんに対する無作為割付臨床試験」を予定

教育講演

「がんに対するケモプリベンション」を予定

パネルディスカッション

「食生活関連がんに対する無作為割付臨床試験」

東西

東西編集後記

1995年、私はこの年を一生忘れないと思います。あの忌まわしい大震災で、このがん疫学研究会のNews Cast 編集責任者(俗称「東西コンビ」)の西方編集長である日山先生が亡くなったのがこの年の序曲でした。この編集責任者というのは、やってみて初めてわかるのですが予想以上に大変な作業で、そのお蔭で責任者同士の親密さが増して行くものです。先輩である日山先生は、研究面でも私の1歩も2歩も先を行かれておりましたが、これを機会にこの交流を研究面にも生かして行こうと思っていた矢先のことでした。とても辛い思いをして、日山先生の追悼特集号(41号)を一人で作りしました。気を取り直して、西方編集長を渡辺先生にお願いし新東西コンビを作って42号、43号と順調に発行しました。ところが、年末に発行する予定の44号の原稿集めをしていた10月末、今度は何と平山先生が亡くなったという知らせが舞い込んできました。予定の44号は、先般お届けした平山先生の追悼特集号となりました。今回お届けする45号は、この悲しい終曲でこの年を締めくくるのはあまりに辛いという思い

と、来るべき新しい年が安寧な年であることを願う思いで作りました。(東北大学医学部公衆衛生学教室 深尾 彰)

このニュース・レターのお世話をさせていただくようになって、もう1年近くたちました。その時々情報や、時には嬉しい知らせやまた時には悲しい知らせ(これはもっと減ってほしいと思いますが)を全国の研究者へと運んでいることと存じます。過日、京都で行われました第54回日本癌学会総会では、疫学がさらに市民権を得て、免疫学と混同されないように努力していかなければならないと思った次第です。医学部において医学教育にも携わっている身としましては、学生への教育も重要ですが、優れた疫学研究を行いその発表をとおして世の中を変えていかなければならないと自戒しております(少し大げさかも知れませんが...)。年度末をひかえ、研究報告書の作成等で多忙なことと存じますが、会員各位には、くれぐれもご自愛下さい。

(京都府立医科大学公衆衛生学教室 渡辺能行)

発行

日本がん疫学研究会

事務局 〒464 名古屋市千種区鹿子殿1-1
愛知県がんセンター研究所疫学部 気付
TEL: 052-762-6111 FAX: 052-763-5233
振込口座 名古屋1-37001

編集責任者

深尾 彰
渡辺能行